

チャポ・グスマンの台頭と社会的諸要因

—メキシコにおける麻薬問題に関する一考察—

野内 遊*

Rise of Chapo Guzman and Social Factors:

A Study of Illegal Drug Problems in Mexico

Yu NOUCHI

Abstract

Contemporary Mexican society can not be analyzed without focusing on Illegal drug problems. Chapo Guzman is the boss of the Sinaloa Cartel, which is the one of the most powerful criminal organizations in Mexico. And he is a key figure in the Mexican underworld since 1980's.

The Illegal drug problems in Mexico are very complicated. For example, Some people on the governmental authority side help the criminal organizations. And the army, which is supposed to face up to the drug cartels is being accused of the violation of human rights. And there is a culture that it must be called "drug culture" in some area of Mexico and so on.

The main purpose of this article is to show the above-mentioned complexity of the illegal drug problems in Mexico through examining the rise of Chapo Guzman in the Mexican underworld. The complexity of this problem partly comes from cultural aspects, regional traditions, the social problems that Mexico has been faced since long time ago, and the existence of the United States as huge consumption market of illegal drugs. We need to recognize that the drug problems are not just drug problems.

1 はじめに

近年のメキシコ社会は、麻薬問題を論じること無しにとらえることはできない。本論文で焦点を当てるチャポ・グスマンは、メキシコの有力な麻薬カルテルであるシナロア・カルテルのカポ (capo)、スペイン語でボスを意味する言葉、である。チャポ・グスマンは、とくに1980年代以降のメキシコ社会で深刻化している麻薬問題に直接的・間接的に大きな影響を与えた、そして与えている人物であ

る。

メキシコ社会における麻薬問題は、非常に根深いものである。そして公権力と非合法勢力、正義と悪といった単純な二項対立ではとらえることができないものである。例えば、公権力の中に属するものが、非合法勢力のために情報を流す、または便宜をはかるという状況、または非合法勢力に対峙するために投入された軍が人権問題で告発されるという状況、個別の例を挙げればきりが無いが、このような状況がメキシコにおける麻薬問題の現状であり、また新たな問題を生み出す要因に

*名古屋大学非常勤講師

もなっている。

本論文は、チャポ・グスマンに焦点を当てることによって、メキシコ社会が直面している麻薬問題の根深さを浮き彫りにすることを目的としている¹⁾。この麻薬問題の根深さとは、上述したような汚職の問題や社会的・文化的な要因が複雑に絡み合うことにより生じているものである。これらの要因に加えて、巨大な麻薬消費市場としてのアメリカ合衆国の存在がこの問題をより一層に複雑なものにしている。

このような社会的背景を知ると、少なくとも私たちは、誰かを、またはある組織を単純に問題の原因として非難することはできなくなると思われる。例えば、それは麻薬戦争を推進するカルデロン政権に対する直接的・間接的な非難である。もちろん、麻薬問題におけるカルデロン政権の政策、とくに北部国境地域を中心に「暴力の拡散」を招いた政策は、メキシコの治安を揺るがしたという点で多くの非難を浴びて当然のことのように思われる。後述するように、カルデロン大統領が就任した2006年以降麻薬関連の殺人は増加の一途をたどっている(第2節 表1を参照)。

しかしながら、メキシコにおける麻薬問題は、単なる「暴力の拡散」だけが問題なのではない。また麻薬カルテルは、暴力だけを用いて勢力を拡大してきたわけではない。確かにメキシコにおける「暴力の拡散」は非常に大きな問題ではある。他方、麻薬問題の根源を探っていくと、メキシコ社会に「暴力の拡散」以前から存在している諸要因が浮かび上がってくる。例えば、それは歴史的・文化的な事象から生じているものであり、メキシコ社会全体に蔓延している汚職の問題である。本論文の目的は、チャポ・グスマンを軸にその

ようなメキシコにおける麻薬問題の持つ多面性そして多層性を明らかにすることである。

メキシコにおける麻薬問題をとらえる上で重要なのは、麻薬問題は複合的な要因を持つものであり、社会の暗部を浮かび上がらせるものであるという認識を持つことだと思われる。本稿においてこれから見ていくように、麻薬問題では先に述べたような単純な二項対立的な論理はそれほど明確には成立しえない。チャポ・グスマンの台頭は、そのような問題、とくにメキシコ社会が抱える病理ともいえる諸問題を浮かび上がらせる存在であると考えられるのである。

2 メキシコにおける主要な麻薬カルテル

メキシコにおける現在の混乱状況の深刻さを知るためには、それ以前の状況を知る必要がある。1980年代以降、メキシコは、ティファナ・カルテル、シナロア・カルテル、フアレス・カルテル、ゴルフォ・カルテルといった有力なカルテルによって分割統治されていた。それを取りまとめたのが、ミゲル・アンヘル・フェリックス・ガジャルド(Miguel Ángel Félix Gallardo)である。彼は、別名エル・パドリーノ(El Padrino)と呼ばれている²⁾。ガジャルドは、メキシコにおける麻薬カルテルの原型を作った人物である。もともと、連邦警察官であり、その後シナロア州知事の警護を担当し、最終的に、メキシコにおける麻薬取引を取り仕切る立場になった人物である。後述するが、メキシコには麻薬密輸の伝統は存在していた。しかしながら、現在存在しているような麻薬カルテルは存在していなかった。カルテルの形成の礎をつくったのが、

ガジャルドであった。

ガジャルドによって生み出されたともいえるメキシコの麻薬カルテル、ティファナ・カルテル、フアレス・カルテル、ゴルフォ・カルテル、シナロア・カルテルは、メキシコからアメリカ合衆国への麻薬密輸を取り仕切っていた³⁾。フアレス・カルテルとシナロア・カルテルは、協定を結び、麻薬密輸をおこなっていた。全く問題がなかったわけではなかったが、1990年代から2000年代初頭までは、2000年代半ば以降に比べて相対的に「平穏な」状況にあったといえる。

しかしながら、このような状況は、2000年代初頭から変化していった。2000年の政権交代⁴⁾以降、有力なカボ・有力な幹部が逮捕・殺害されるなどにより、メキシコにおける麻薬カルテルの勢力図が変わっていったのである。チャボ・グスマンは、1993年にグアテマラで逮捕され、それ以降、刑務所に収監されていたが、政権交代直後に脱獄している。

チャボ・グスマンは、有力幹部がいなくなり、組織が弱体化した他の麻薬カルテルのプラサ⁵⁾に積極的に進出しようとした。2006年に大統領に就任したカルデロン大統領が、国家の最優先課題として、麻薬カルテルに対する戦争を宣言したことが、メキシコの麻薬戦争の拡大の理由として知られているが、チャボ・グスマンの存在も、メキシコにおける麻薬戦争の拡大の一つの要因であるといえる。

カルデロン大統領による麻薬カルテルに対する方策は、簡単にいうならば、武力をもって麻薬カルテルを制圧するというものである。とくに、1940年代以降、メキシコ社会の表舞台に立つことがあまり無かった軍を前面に押し出したところに特徴がある。

このような方策は、ある意味で成功したと

いえるだろう。有力なカボ、そして多くの幹部たちが捕まり、または、殺害され、そしてアメリカ合衆国へと引き渡されていった。その一方で、このようなメキシコ政府による方策は、メキシコ社会に混乱を引き起こした。有力なカボや幹部が捕まり、殺害されることにより、裏社会の中に権力の空白が生まれたのである。その結果、生じたのが暴力の連鎖である。

表1 メキシコにおける麻薬関連の殺人の増大
(単位:件)

年	数
2006	1,500
2007	2,700
2008	5,630

(出所) *Mexico's Drug-Related Violence*, 10.

表1は、近年のメキシコにおける麻薬に関連した殺人の数を示したものである。近年、メディアを通じて発表されるメキシコに関するニュースは、麻薬カルテルに関連したものが多く、数十人もの死体、そして多くの場合、首なしの死体が発見されるニュース、刑務所に入った囚人たちを対立する麻薬カルテルのメンバーが暗殺するというニュースが、報道されている。これらの事件は、個別に報道されるわけだが、これらの事件の積み重ねが、表1に示されている数値にあらわれているといえる。

当然、このような状況は、メキシコ国内だけでなく、国外からも多くの批判が寄せられている。とくにメキシコと国境を接しているアメリカ合衆国では、非常に深刻な問題であるととらえられている。アメリカ合衆国議会のシンクタンクである Congressional Research

Service は、メキシコの麻薬カルテルに関する複数のレポートを発表している⁶⁾。

また、アメリカ合衆国政府は、メリダ・イニシアティブをメキシコ、中米諸国、ハイチ、ドミニカ共和国と取り交わしている。メリダ・イニシアティブは、総額 16 億ドルをこれらの国々に麻薬犯罪組織対策用の援助をおこなうというものである。中米諸国、ハイチ、ドミニカ共和国を含んでいるが、主な対象となるのは、メキシコである。

このような状況の中、メキシコでは、次の七つの麻薬カルテルに集約されてきている。1) ティファナ・カルテル、2) ファレス・カルテル、3) ゴルフォ・カルテル、4) シナロア・カルテル、5) ベルトラン・レイバ・カルテル、6) ロス・セタス、7) ファミリア・ミチョアカーナの七つである⁷⁾。

とくに 2000 年代以降のメキシコの麻薬カルテルで重要なのは、チャボ・グスマンのシナロア・カルテルとゴルフォ・カルテル、そしてもともとはゴルフォ・カルテルの戦闘部隊であったロス・セタスである。

ティファナ・カルテルは、カリフォルニア州と接しているティファナに拠点を構えている。ティファナ・カルテルは、アレジャーノ・フェリックス (Arellano Felix) 兄弟によって指揮されてきたが、2000 年代初頭までには、兄弟の大半が、逮捕されるか殺害されている。現在では、かつてほどの大きな勢力はもっていない。

ファレス・カルテルも、ティファナ・カルテルと同様である。空飛ぶ麻薬王 (El Señor de Los Cielos) の異名をとったアマード・カリージョ・フエンテス (Amado Carillo Fuentes) が、指揮していた時代は、非常に強力な組織であった⁸⁾。チャボ・グスマンのシナロ

ア・カルテルもファレス・カルテルと同盟を結んでいた。しかし、1997 年にアマードが死亡して以降、徐々に勢力が衰えていった。アマードの死亡以降、アマードの弟であるピセンテがカルテルの実権を握った。2001 年にチャボ・グスマンが脱獄した後、カルテルの不满分子たちが、シナロア・カルテルへと合流していった。シウダー・ファレスという物流の拠点を押さえているため、依然強力な力を持っているが、アマードの時代に比べると他の麻薬カルテルとの力関係は衰えている。チャボ・グスマンは、このような状況を好機ととらえ積極的にファレス・カルテルのプラサへと進出していった。これが、シウダー・ファレスが、麻薬戦争の主戦場の一つとなった原因である。

ベルトラン・レイバ・カルテルは、もともとは、シナロア・カルテルの一員であったベルトラン・レイバ兄弟によって創設された。彼らは、長い間チャボ・グスマンに仕えていた。ところが、2006 年以降、チャボ・グスマンに対する不信感から袂を分かち、独立した。

ファミリア・ミチョアカーナは、メキシコ中西部にあるミチョアカン州を拠点としている組織である。2006 年以降、台頭してきた新興勢力である⁹⁾。現在は、ファレス・カルテル、ベルトラン・レイバ・カルテル、そしてロス・セタスと同盟を結んでいる。

ゴルフォ・カルテルとロス・セタスは、シナロア・カルテルとの抗争を含め 2000 年代の麻薬戦争の激化の要因となった組織である¹⁰⁾。ゴルフォ・カルテルは、メキシコ北東部にあるタマウリパス州を拠点としている。後述するが、1980 年代後半から 1990 年代初頭にかけて政権与党との密接な関係からシナロア・カルテルをしのぐ勢力を誇った組織である。

ロス・セタスは、ゴルフォ・カルテルのカポであったオシエル・カルデナスによって創設されたカルデナス直属の武装集団である。黎明期のメンバーは、メキシコ空軍のエリート部隊出身者たちによって構成されていたことで知られている。現在では、グアテマラの軍出身者なども参加している。非常に好戦的で、残虐なことで知られている集団である¹¹⁾。カルデナスが、2007年にアメリカ合衆国へ引き渡されて以降、ゴルフォ・カルテルとは距離を置くようになり、独自路線を取っている。

3 メキシコにおける麻薬カルテルの強大化

メキシコにおける麻薬問題を論じる際に巨大な市場としてのアメリカ合衆国を無視することができない。かつては、アメリカ合衆国への麻薬密輸、とくにコカイン¹²⁾に関しては、コロンビアの麻薬カルテルが有名だった。メデジン・カルテル、カリ・カルテルは、現在のメキシコの麻薬カルテルと同様に、またはそれ以上に隆盛を誇っていた。しかしながら、現在では、メキシコの麻薬カルテルが、アメリカ合衆国へのコカイン密輸に大きな影響力を持つようになっている。*Mexico's Drug Cartels* をまとめたコーリン・クック (Colleen Cook) (Cook 2007: 4) によると、アメリカ合衆国へ密輸されるコカインの90%がメキシコを経由している。その最大の要因として、従来存在していた、コロンビアを中心とした南米からカリブ海を経由しフロリダへとコカインを密輸するルートが、アメリカ合衆国における取り締まりの強化の結果、機能しなくなったことを挙げることができる。

その過程でメキシコが麻薬密輸の重要拠点

としての存在感を高めていったのである。全長約3000キロメートルに及ぶ国境地域を完全に防御する術はない。このことは、同じ時期に増大した、メキシコからアメリカ合衆国へと向かう非合法移民の取り締まりについてもいえる。1980年代は、メキシコとアメリカ合衆国の二カ国間関係が、大きく変化した時期であるといえる¹³⁾。

表2 2008年のアメリカ合衆国における12才以上の麻薬使用者 (単位: 100万人)

種類	人数
マリファナ	15.2
医療目的以外の精神安定剤、鎮痛剤、興奮剤	6.2
コカイン	1.9
幻覚剤	1.1
吸引剤	0.6
ヘロイン	0.2
非合法薬物 使用者総数	20.1

(出所) *Results from the 2008 National Survey on Drug Use and Health: National Findings*, 16.

表2を見ると、コカインの使用者の数自体はそれほど多くはない。では、コカインの何が問題なのであろうか。コカインの問題点として、依存度が他の違法薬物より強く¹⁴⁾、また、販売価格も高く、麻薬カルテルに膨大な利益をもたらすことを挙げる事ができる。例えば、*El negocio* の著者であるカルロス・A・ロレット・デ・モラ (Carlos A. Loret de Mola) (Mola 2001: 77-79) によると、1キロのマリファナは、ニューヨークで約1万ドルで取引される。一方、1キロのコカインは約17万ドルで取引される。この膨大な利益をもたらすコカインのアメリカ合衆国への密輸ルートを

メキシコの麻薬カルテルが押さえていることが、彼らを非常に強力な、そして危険な組織へと変貌させていったといえる。

時代を反映する人物として語られる人物は、どの分野にも存在する。麻薬問題に関しては、コロンビアのメデジン・カルテルのパブロ・エスコバル (Pablo Escobar) がそのような存在であった¹⁵⁾。現在では、チャポ・グスマンが、そのような役割を引き受けているといえる。しかしながら、彼らにしても、あくまでも象徴的な存在にすぎない。エスコバル亡き後も、コロンビアにおける麻薬産業は依然存続している。おそらく、チャポ・グスマンが、どのような形であれ、歴史の表舞台から消えることになっても、メキシコにおける麻薬産業は存続し続けることは間違いない。

巨大な市場としてのアメリカ合衆国は、メキシコにおける麻薬カルテルの台頭の一つの大きな要因である。しかしながら、メキシコにおける麻薬問題は、巨大な市場としてのアメリカ合衆国の存在だけに起因するものではない。メキシコ社会そのものにも多くの要因が存在している。そして、それらは「社会問題」として認識される必要があるものである。

4 チャポ・グスマンの台頭と彼を取り巻く社会的環境

メキシコにおいて麻薬は、一つの巨大な産業である。チャポ・グスマンは、この麻薬産業を隆盛に導いた立役者の一人であるといえる。チャポ・グスマンの台頭は、彼個人の才覚もあるが、それ以上に彼をとりまく、つまりメキシコ社会に内在されている要因の存在が大きい。それは、ある部分は、歴史的要因から生じているといえる。また、文化的要因

から生じているともいえる複雑なものである¹⁶⁾。これらのことをとらえる上で重要になるのが、彼の生まれ育ったシナロア州の状況である。

シナロア州は、麻薬問題において特殊な地域である。まず、多くの麻薬密売人がシナロア州から輩出されている。カポに限ってみても、チャポ・グスマンだけでなく、ティファナ・カルテルのアレジャーノ・フェリックス兄弟、フアレス・カルテルのアマード・カリージョなどが、シナロア州出身である。このような背景には、この地域における社会上昇の手段としての麻薬産業の存在があるといえる。これは、裏を返せば、この地域における「貧困」の存在を浮かび上がらせるものでもある。チャポ・グスマンも貧農の子どもとして生まれている¹⁷⁾。

歴史的に見ると、ケシ栽培の導入もこの地域における「貧困」がその背景にあった。シナロア州において初めて、ケシの栽培が導入されたのは 20 世紀初頭のことで、中国人移民によって導入されたものであった。非常に貧しい農民の多かったシナロア州では、急速にケシの栽培が広がっていった。1920 年代から 30 年代にかけてメキシコの政界の黒幕的存在であったプルタルコ・エリアス・カリェス (Plutarco Elías Calles) に主導された反中国人移民運動の高まりの結果、中国人移民は排斥されたが、ケシの栽培は地元農民たちに受け継がれていった (Godoy 2008: 86-90)。

ケシの栽培の浸透とともにこの地域で生まれたのが、ナルコ・コリード (Narcocorrido) と呼ばれる麻薬密輸業者やカポなどを称える音楽ジャンルである。麻薬、そして麻薬産業が、非常に身近な存在としてとらえられているこ

とを示しているといえる。

ナルコ・コリードを、単なる音楽の一ジャンルであると片付ける事は簡単である。しかしながら、ある麻薬カルテルを支持し、賞賛するナルコ・コリードを歌う歌手が、殺人事件に巻き込まれるという状況を考えると単なる音楽として片付けるわけにもいかないだろう。例えば、2006年に殺害されたヴァレンティン・エリサルデ (Valentín Elizalde) は、フアレス・カルテルのピセンテ・カリージョを賞賛する歌を歌っている。それが、対立関係にあったゴルフォ・カルテルの怒りを買って殺害されたといわれている¹⁸⁾。

また、麻薬カルテルを称えるという歌は、様々な議論を巻き起こしている。2011年5月にシナロア州知事のマリオ・ロペス・ヴァルデス (Mario López Valdez) が、バーやナイトクラブでのナルコ・コリードの演奏の禁止を指示した¹⁹⁾。ナルコ・コリードは、主にメキシコ北部地域を中心に人気のある音楽であり、メキシコ全土で人気のあるものではない。しかしながら、ある種文化として根付いているものであり、メキシコの麻薬問題を論じる上で、重要な要素であるといえる。

この地域に根付いている麻薬文化という点では、ヘスス・マルベルデ (Jesús Malverde) の存在も無視することができない。マルベルデは、麻薬カルテルの守護神として祭られている。マルベルデは、メキシコの独裁者であるポルフィリオ・ディアス (Porfirio Díaz) の政権下 (1877-1911) に活躍したといわれた盗賊である。歴史家によれば、マルベルデが実在したという明確な証拠はない。シナロア州西部出身のエラクリオ・ベルナル (Heraclio Bernal) と同じくシナロア州北部出身のフェリーペ・バチョモ (Felipe Bachomo) という

2人の盗賊を混ぜた想像上の人物であるとしている (Godoy 2008: 94-95)。

マルベルデは、一種の義賊のような人物であったといわれている。ロビン・フッドのように裕福な人々から盗み、そしてそれを貧しい人々に施したからである。マルベルデの信奉者たちによると、マルベルデは、地元カウディージョの配下により捕らえられ、1909年5月3日に処刑された。毎年5月3日にマルベルデの教会やシナロア州の教会でマルベルデに対する祝祭が一部の人々によっておこなわれている。マルベルデは、麻薬産業における一つの文化的・宗教的な象徴となっているのである。

麻薬問題をメキシコ国内全体における社会問題という認識に立つならば、このような「麻薬文化」の根付いた地域の存在を無視することはできない。少なくとも、麻薬問題は、「力」だけでは解決できない問題であるといえるだろう。チャポ・グスマンは、このような社会的な背景があるシナロア州で1957年4月9日に貧しい農民の子として生まれた。

5 メキシコにおける麻薬問題における「暴力の拡散」以外の問題

メキシコにおける麻薬問題は、「暴力の拡散」だけが問題ではない。むしろ、メキシコ社会における病理ともいえる汚職、麻薬カルテルと公権力との関係が非常に問題である。チャポ・グスマンは、暴力を勢力拡大の一つの手段として用いているが、もう一つの手段は、公権力との癒着である。チャポ・グスマンもしくはシナロア・カルテルと公権力との関係には様々な疑惑がある。メキシコ社会におけるチャポ・グスマンの台頭は、暴力と公

権力との癒着の二つの方法論によってもたらされたものであるといえる。癒着は、政治家及び政府高官レベルと現場の警察官・看守レベルに分けることができる。そして、これらの問題は、チャボ・グスマンにのみ当てはまる問題ではなく、メキシコ社会全体の問題でもある。

チャボ・グスマンは、1993年にグアテマラで捕まっている。そして、メヒコ州にあるラ・パルマに収監された。その後、1995年にハリスコ州にあるプエンテ・グランデへと収監された。6年後の2001年に脱獄をするまで、プエンテ・グランデに収監されていた。チャボ・グスマンと彼の仲間たちは、看守たちに賄賂を渡し、刑務所の中でパーティーを開いたり、麻薬取引をおこなっていた。また、刑務所の外で彼を支える多くの部下・仲間がいた。多くの敵がいる刑務所の外よりも、警備の厳重な刑務所の中の方が安全であったといえる。2001年の脱獄の際には、当直の刑務官たちの助けを借りて脱獄に成功している (Ravelo 2006: 111-123) (Beith 2010: 5-19)。ゴルフ・カルテルのカポであったカルデナスも2003年に捕まってから2007年にアメリカ合衆国へ引き渡されるまでの間、獄中から指示を出していた。

メキシコにおける麻薬カルテルの強大化には、様々な要因がある。しかしながら、上述のチャボ・グスマンやカルデナスの例を見ると分かるように、非合法勢力と権力の関係の一つの原因があるように思われる。つまり、単純に、権力と非合法勢力を区切ることができないところに、メキシコが抱えている問題の根深さがあらわれている。

メキシコ社会において、汚職・権力の腐敗は、古くて新しい問題である。長い間メキシ

コ社会において汚職・腐敗の象徴となっていたのは、制度的革命党 (Partido Revolucionario Institucional = PRI 以下、PRI) である。PRIは、1929年に政権を獲得してから2000年まで71年間メキシコ社会を統治していた。PRIは、メキシコを農業国から工業国へ移行させ、また1940年代以降、30年近い持続的経済成長をメキシコにもたらした政党である。しかしながら、メキシコの歴史、とくにPRI時代の歴史を振り返るとその歴史は、腐敗・汚職の歴史であるといえる。

PRIの政治家と麻薬カルテルとの関係も取りざたされていた。しかしながら、はっきりとした証拠というものはなく、多くの場合、噂として語られるだけであった。PRIと麻薬カルテルとの関係がはっきりとしたのが、そして、メキシコ社会に衝撃を与えたのが、カルロス・サリナス (Carlos Salinas) 大統領 (1988-1994) の実兄であるラウル・サリナス (Raúl Salinas) が、ゴルフ・カルテルとの関係を取りざたされた事件である。ラウルは、1994年に起きたPRI幹事長のマッシュー暗殺の首謀者として逮捕された。

国民行動党 (Partido Acción Nacional = PAN, 以下 PAN) はこのように麻薬カルテルとの関係だけでなく、腐敗したPRI体制に対する不満票を取り込む形で、1980年代以降、地方自治体レベルから徐々に党勢を拡大していった。そして、2000年の大統領選挙で政権交代を実現した。

では、政権交代後のPANは、汚職とは無縁だったのだろうか。政権交代後の初の政権であるフォックス政権でも、大統領遊説スケジュール調整責任者 (director de la coordinación de giras del presidente) であったナウム・アコスタ・ルゴ (Nahúm Acosta Lugo)

が、2005年2月に麻薬カルテルとの関係を取りざたされ、逮捕されている。また、チャポ・グスマンの脱走がフォックス政権開始直後に起こったということもあり、そして依然、捕まえることができずにいるため、政府高官にまで彼の息がかかっているという見方をされている²⁰⁾。

これらの事例を見ても分かるように、メキシコでは麻薬カルテルとの関係が取りざたされる政治家・政府高官が非常に多い。これは、逆に言うと、麻薬カルテルの公権力への浸透が進んでいるといえる。この問題は、麻薬カルテルとの関係でなく、政治・政治家への不信へとつながるため軽視することはできない。

権力との癒着は、必ずしも政権上層部だけとの癒着だけではない。もちろん、強大な権力を持つ人々は大きな影響力を与えるが、市町村の警察署長・現場の警察官など比較的身近な公権力の側の人間との癒着も、全体としてみれば大きな問題となるものである²¹⁾。とくにメキシコの警察に対する信頼感は国内だけでなく、国外からも低い。カルデロン政権下で、軍が表舞台にでてきたが、その背景にアメリカ合衆国が、麻薬取り締まりのメキシコ側のカウンターパートとしての警察をあまり信用していなかったことをあげることができる²²⁾ (Freeman y Sierra 2005: 337-351)。

この癒着・汚職の問題は、メキシコ社会において慢性的ともいえる問題である。メキシコ社会における暴力の拡散は、非常に問題である。しかしながら、その問題の根本にさかのぼると、公権力と非合法勢力との癒着に行き着くのである。メキシコにおける麻薬問題に関する著作を多く書いているリカルド・ラベロ (Ricardo Ravelo) (Ravelo 2007: 13) は、「メキシコでは、権力の後ろ盾なしに犯罪組

織は存在し得ない」(En México no hay crimen organizado sin el apoyo del poder) と述べている。私たちは、彼の言葉に真摯に耳を傾ける必要があるといえる。

6 麻薬問題の難しさとチャポ・グスマン

メキシコにおける麻薬問題は、知れば知るほど袋小路にはまっていくものである。カルデロン政権における政策の結果、暴力が拡散したのは事実である。この点は、カルデロン政権の支持者たちがいくら擁護しようにも擁護することはできないことであると思われる。しかしながら、巨大な麻薬市場であるアメリカ合衆国の存在、そしてメキシコ社会に根付く汚職や、伝統的にそして歴史的に麻薬産業を維持し発展させてきた構造もまた同時に存在していることを踏まえると、カルデロン政権を一方向的に非難することもできない。

チャポ・グスマンは、このように袋小路にある麻薬問題をめぐるメキシコ社会の影の部分の一端を担っている人物であるといえる。彼が今後どのような末路をたどるのかは誰も分らない。しかしながら、2000年代のメキシコ、または麻薬戦争下のメキシコを将来的に考察しようとする際、この人物を抜きにしてこの問題、そして現象を論じることはできない。チャポ・グスマンに対する歴史的評価がどのようなものになるのかは、予測することはできない。必要以上に評価するべきではないが、過小評価するべき人物でもない。少なくとも近年のメキシコ社会における麻薬問題の象徴的人物であることは間違いない。

メキシコ社会の現状という観点からチャポ・グスマンの台頭をとらえると、非合法勢

方に組みする人物がメキシコ社会の象徴の一つとなってしまうところに、現代メキシコ社会が抱える問題の大きさが浮かび上がってくるといえる。確かに、カルデロン政権には非難されるだけの理由がある。しかしながら、メキシコにおける麻薬問題は非常に国内的な要因、そして伝統的な、または慢性的ともいえる社会問題から生じていることも事実である。まず、その点に目を向けること、現実を直視すること、それがメキシコにおける麻薬問題をとらえるための第一歩であると思われる。

注

- 1) チャボ・グスマンに焦点を当てた先行研究として Malcolm Beith による *The Last Narco Hunting El Chapo: the World's Most Wanted Drug Lord* がある。Malcolm Beith は、チャボ・グスマンを台頭させた社会的要因にも触れてはいるが、それよりもチャボ・グスマンの人物像、彼をとりまく人間関係や社会環境の変化、そしてそれらの変化に対して彼の取った行動に焦点を当てている。本稿では、Malcolm Beith の取ったアプローチとは逆に、チャボ・グスマン個人のものよりも、それを生み出した社会的背景に注目する。なぜならば、チャボ・グスマンの台頭の背景には、彼個人の資質や才覚だけでなく、メキシコ社会に内在する諸要因が大きく関係していると考えられるからである。そして、このような社会的諸要因を何らかの形で断ち切らなければ、将来的に第2、第3のチャボ・グスマンがあらわれると考えているからである。
- 2) エル・パドリーノは、スペイン語でゴッドファーザーを意味する言葉である。メキシコの麻薬カルテルの構成員は、あだ名をもち、それが通称になることが多い。例えば、チャボ・グスマンのチャボも背が低いという意味である。実際のチャボ・グスマンの身長は約 168 センチで、他のメキシコ人と比べて背が低いというわけでもない。エル・パドリーノやチャボ以外の有名なカルテルの構成員のあだ名としては、ベルトラン・レイバ・カルテルの幹部でラ・バルビー (La Barbie) と呼ばれたエドガー・ヴァルデス・ビジャレアル (Edgar Valdez Villareal) や、エル・マタ・アミーゴス (El Mata Amigos) と呼ばれたゴルフ・カルテルの元カポであったオシエル・カルデナス (Osiel Cardenas) のあだ名が有名である。ラ・バルビーの由来は、バービー人形の恋人のケンに由来していると言われている。マタ・アミーゴスは、ゴルフ・カルテルを掌握する過程で友人たちを殺害してきたことに由来していると言われている。
- 3) メキシコにおける麻薬カルテルの歴史的流れを知るには、Malcolm Beith による *The Last Narco-Hunting El Chapo: the World's Most Wanted Drug Lord* と George W. Grayson による *Mexico-Narco-Violence and a Failed State?* が詳しい。
- 4) 2000 年政権交代については、第 5 節を参照のこと。
- 5) Plaza は、一般的なスペイン語では、広場、市場などを意味するが、麻薬問題では、麻薬密輸ルートまたは縄張りを意味する。
- 6) 例えば、Mexico-U.S. Relations: Issues for Congress, Mérida Initiative for Mexico and Central America: Funding and Policy Issues, Mexuco's Drug-Related Violence, Mexico's Drug Carteles Mexico's Drug Trafficking Organizations: Source and Scope of the Rising Violence などである。これらのレポートは、基本的にアメリカ合衆国側からの立場で書かれているが、メキシコにおける麻薬問題の状況をとらえる上で有益な資料である。
- 7) メキシコにおける麻薬カルテルの現状については、Congressional Reserch Service による *Mexico's Drug Cartels*, *Mexico's Drug-Related Violence*, *Mexico's Drug Trafficking Organizations: Source and Scope of the Rising Violence* に詳しい。
- 8) コロンビアからコカインをアメリカ合衆国へとジェット機で密輸する手法を得意としていたのでこのような呼び名がつけられた。
- 9) ミチョアカン州の州都モレリアは、麻薬カルテルとの戦いを宣言したカルデロン大統領の出身地である。
- 10) シナロア・カルテルとロス・セタスの抗争については、Ricardo Ravelo による *Los Narcoabogados* に詳しい。
- 11) 本文中で述べたように、ロス・セタスは、近年のメキシコにおける麻薬問題について論じる上で無視することのできない存在である。ロス・セタスの実体については、Ricardo Ravelo に

- よる *Crónicas de Sangre – Cinco historias de los Zetas*、Jorge Fernández Menéndez Víctor Ronquillo による *De los Maras a los Zetas* の Los periodistas, víctimas del narcotráfico の章に詳しい。
- 12) コカインは、南米アンデス地域原産の1-3メートルほどの低木コカの葉から抽出されるコカインアルカロイドを原料とする麻薬である。アルカロイド成分を含むコカは、アンデス三カ国（コロンビア、ペルー、ボリビア）のみで栽培される。コカインは、まずコカの葉を灯油、水、炭酸ナトリウム、硫酸の溶液に浸した後、柔らかくしてペースト状のものを作る。これがコカペースト、パスタ・パシカと呼ばれるもので、これに塩酸、アセトン、エーテル、アンモニアなどの薬品を加えて精製し、粉末状にしたものが塩酸コカインである（二村 2006：132）。
- 13) この問題については、拙稿『現代メキシコ社会の変容と北部国境地域』において考察をおこなっている。
- 14) コカインが問題視される最大の理由は、その精神依存形成能である。医師であり、薬物依存の研究者でもある和田清によると、サルを用いた自己投与実験では、比率累進法でのレバー押し回数がコカインでは、6,400-12,800回にも達している。他方、ニコチンでは、800-1,600回、アルコール及びモルヒネでは、1,600-6,400回、アンフェタミンでは、2,690-4,530回であった（和田 2000：138）。
- 15) パブロ・エスコバルは、コロンビアのメデジンに本拠地をおくメデジン・カルテルを創設した。アメリカ合衆国へのコカインの密輸で膨大な富を築いた「麻薬王」として知られている。メデジン・カルテルについては、ガイ・グリotta、ジェフ・リーンによる『キングズ・オブ・コカイン—コロンビア・メデジン・カルテルの全貌』に詳しい。エスコバルは、1993年にアメリカ合衆国政府の支援を受けたコロンビアの特捜隊によって殺害されている。その過程については、マーク・ボウデンによる『パブロを殺せ—史上最悪の麻薬王 VS コロンビア、アメリカ特殊部隊』に詳しい。
- 16) これら要因は、非常に多岐にわたる。文化的側面に焦点を当てた先行研究として Jorge Alan Sánchez による “Procesos de institucionalización de la narcocultura en Sinaloa” がある。
- 17) メキシコにおける「貧困」の度合いを知る一つの指標として、政府が発表している周縁化指数がある。周縁化指数は次の八つの指標を総合したものである。1) 15才以上の非識字者の割合。2) 15才以上の初等教育未修了者の割合。3) トイレと下水設備が未整備の住居の割合。4) 電気が未整備の住居の割合。5) 水道設備が未整備の住居の割合。6) 雑居住宅の割合。7) 土間住宅の割合。8) 冷蔵庫のない住居の割合。周縁化指数は、次の1) と最も低い、2) 低い、3) 中間、4) 高い、5) と最も高いのカテゴリーに分けられている。周縁化指数によると、シナロア州は、メキシコ 32 の地域の中で 12 番目であり、州全体を見るとそれほど貧しい地域ではない。しかしながら、問題は、シナロア州における極端に貧しい地域の存在である。とくに、チャボ・グスマンや 1970 年代から 80 年代にかけて主要な麻薬密輸業者であったラファエル・カロ・キンテロ (Rafael Caro Quintero) の出身地であるバディラグアトは、2005 年の調査において総人口 31,487 人であるが、その中で「高い」に 13,288 人が、11,091 人が「とても高い」に分類されている場所である (Consejo Nacional de Población 2007: 198)。
- 18) しかしながら、犯人は見つかっていない。
- 19) <http://www.milenio.com/cdb/doc/noticias2011/58c0b884bd6410700b50e014114a83b2> 最終アクセス日 2011 年 7 月 22 日。
- 20) Ricardo Ravelo は、*Los Narcoabogados* において、1 章を割いて、第 11 章 Sinaloa: El cartel del sexenio、この問題とシナロア・カルテルの活動について考察している。
- 21) 2006 年 12 月に就任したカルデロン大統領は、2 年後の 2008 年 12 月時点で、11,500 人の公務員を汚職で解雇している (Beittel 2009: 9)。
- 22) アメリカ合衆国のメキシコの警察に対する不信任は、1980 年代にまでさかのぼることができる。1985 年 2 月に DEA の捜査官で、現地警察と麻薬カルテルの関係を追っていた Enrique Camarena Salazar が、運転手とともに誘拐され、拷問を受けた後に殺害されたのである。この事件は、メキシコとアメリカ合衆国との関係を緊張させた事件でもある。

引用文献

- Astorga, Luis. 1997. “Los corridos de traficantes de drogas en México y Colombia”, prepared for delivery at the 1997 meeting of the Latin American Studies Association, Continental Plaza Hotel,

- Guadalajara, Mexico, April 17-19.
- Bagley, Bruce. 2003. "La globalización de la delincuencia organizada - las actividades de la mafia rusa en América Latina" *Foreign Affairs en Español*. Volumen 3, Número 2. 110-36.
- Beith, Malcolm. 2010. *The Last Narco-Hunting el Chapo, the world's most wanted drug lord*. England: Penguin Books.
- Beittel, June S. 2007. *Mexico's Drug-Related Violence*. Congressional Research Service.
- . 2011. *Mexico's Drug Trafficking Organizations: Source and Scope of the Rising Violence*. Congressional Research Service.
- Bowden, Charles. 2010. *Murder City - Ciudad Juárez and the Global Economy's New Killing Fields*. New York: Nation Books.
- ボウデン・マーク. 2002. 『パブロを殺せ-史上最悪の麻薬王 VS コロンビア, アメリカ特殊部隊』早川書房.
- Consejo Nacional de Población. 2007. *Índice de marginación a nivel localidad 2005*. Consejo Nacional de Población.
- Cook, Colleen W. 2007. *Mexico's Drug Cartels*. Congressional Research Service.
- Grayson, W. George. 2011. *Mexico Narco-Violence and a Failed States?* New Brunswick: Transaction Publishers.
- Fernández, Jorge Menéndez. 2001. *El otro poder: Las redes del narcotráfico, la política y violencia en México*. Mexico: Nuevo Siglo.
- Freeman, Laurie, and Jorge Luis Sierra. 2005. "México: la trampa de la militarización" Coletta, A. Youngers and Eileen Rosin (eds.), *Drogas y democracia en América Latina: el impacto de la política de Estados Unidos*. Argentina: Editorial Biblos.
- 二村久則. 2006. 「南北アメリカのドラッグ・ネットワーク」二村久則・山田敬信・浅香幸枝(編)『地球時代の南北アメリカと日本』ミネルヴァ書房. 123-145.
- グリオッタ・ガイ, ジェフ・リー. 1992. 藤井留美(訳)『キングズ・オブ・コカイン—コロンビア・メデジン・カルテルの全貌—上』草思社.
- . 1992. 『キングズ・オブ・コカイン—コロンビア・メデジン・カルテルの全貌—下』草思社.
- Loret, Carlos A. de Mola. 2001. *El Negocio: La economía de México atrapada por el narcotráfico*. Mexico: Editorial Grijalbo.
- Menéndez, Jorge Fernández y Víctor Ronquillo. 2006. *De los Maras a los Zetas*. Mexico: Debolsillo.
- 野内遊. 2011. 『現代メキシコ社会の変容と北部国境地域』(博士論文)名古屋大学大学院国際開発研究科.
- Ravelo, Ricardo. 2005. *Los capos—las narco-rutas de México*. Mexico: Plaza y Janes México.
- . 2006. *Los Narcoabogados*. Mexico: Debolsillo.
- . 2007. *Crónicas de Sangre—Cinco historias de los Zetas*. Mexico: Debolsillo.
- Sánchez Godoy, Jorge Alan. 2008. "Procesos de institucionalización de la narcocultura en Sinaloa". *Frontera Norte* Vol. 21, Número 41. 77-103.
- Santana, Adalberto. 2004. *El narcotráfico en América Latina*. Mexico: Siglo Veintiuno Editores.
- U.S. Department of Health and Human Services. 2009. *Results from the 2008 National Survey on Drug Use and Health: National Findings*. U.S. Department of Health and Human Services.
- 和田清. 2000. 『依存性薬物と乱用・依存・中毒』星和書店.